

令和元年度
厚生労働行政推進調査事業費
分担研究報告書

「平成 23 年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）」から見た障害者のニーズ：テキストマイニングによる知的障害、発達障害、高次脳機能障害の診断があった者の自由記述回答の分析

研究分担者 清野 絵 国立障害者リハビリテーションセンター
研究分担者 北村 弥生 国立障害者リハビリテーションセンター
研究分担者 今橋久美子 国立障害者リハビリテーションセンター
研究代表者 飛松 好子 国立障害者リハビリテーションセンター
研究分担者 岩谷 力 長野保健医療大学

研究要旨

当事者ニーズに基づく制度設計および制度の効果的運用のためには、障害者のニーズを適切に把握することが必要である。本研究では、障害福祉データの利活用の検討に資することおよび、障害者のニーズを把握することを目的として、「平成 23 年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）」の詳細統計として、自由記述回答をテキストマイニングにより質的に分析を行った。分析対象は自由記述回答があった計 661 名の生活のしづらさや将来の不安等についての記述であった。内訳は、知的障害の診断があった者 53 名（55.6±26.2 歳）、発達障害の診断があった者 287 名（22.7±16.6 歳）、高次脳機能障害の診断があった者 237 名（67.8±17.2 歳）、重複障害の診断があった者 84 名（44.1±28.7 歳）であった。結果、障害者のニーズとして、親や家族なき後の将来の生活への対応、家族の負担への対応、通院支援、移動支援、学校や病院での適切な支援、バリアフリー環境の整備、仕事、結婚、避難生活への不安への対応、地域格差の解消、社会の障害理解の促進があることが示唆された。

A. 研究目的

当事者ニーズに基づく制度設計および制度の効果的運用のためには、障害者のニーズを適切に把握することが必要である。本研究では、障害福祉データの利活用の検討に資することおよび、障害者のニーズを把握することを目的として、「平成 23 年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）」の自由記述回答の分析を行

った。

B. 研究方法

1) 方法

厚生労働省が実施した「平成 23 年生活のしづらさなどに関する調査」¹⁾の入力データ（Microsoft Excel 形式）を用いた。

2) 元データの調査概要

調査日は平成23年12月1日であった。調査は、平成17年国勢調査で使用された調査区を用い、層化無作為抽出法により全国の調査区として約4,500地区が抽出され、その調査地区に居住する全世帯員を調査した。回収は郵送法で行った。調査対象者数は27,208名、調査不能であったものを除いた調査票配布部数は24,154部、回収数は16,531部、有効回答数は14,243名であった。

3) 分析対象

本研究の分析対象は、知的障害、発達障害、高次脳機能障害の診断があった者のうち、自由記述回答のあった者は661名（平均年齢44.2±28.2歳、男性428名・女性232名・不明1名）であった。分析対象として自由記述回答は、調査の間31の生活のしづらさについてのものであった。具体的な設問内容は、「あなたは、生活をしている中で、どのような困ることがありますか。将来の不安も含めて、ご自由にお書きください。」であった。なお、分析対象の設定理由は、障害種別によりニーズが異なると推測されることと、当該調査で把握できる最も詳しい障害種別が、知的障害、発達障害、高次脳機能障害の診断の項目であったことによる。

4) 分析方法

分析方法は、自由記述回答のテキストデータを、テキストマイニングソフトであるKH Coder (Ver.2)で質的に分析を行った。なお、KH Coderは、テキストデータを分析するためのフリーソフトウェアであり、学術研究での研究成果も蓄積されている²⁾。

(倫理面への配慮)

「生活のしづらさなどに関する調査」については、研究代表者と代表する研究分担者の所属機関において研究倫理審査委員会に申請し、個人情報を対象としていないため、「非該当」の結果を得た。

C. 研究結果

本研究では、当該調査で把握できた知的障害、発達障害、高次脳機能障害の診断がある者について分析を行った。

1) 基礎情報

知的障害、発達障害、高次脳機能障害の診断があった者のうち、自由記述回答のあった者は661名（平均年齢44.2±28.2歳、男性428名・女性232名・不明1名）であった。このうち、知的障害の診断があった者（重複障害の者を除く）は53名（平均年齢55.6±26.2歳、男性27名・女性26名）、発達障害の診断があった者（重複障害の者を除く）は287名（平均年齢22.7±16.6歳、男性209名・女性78名）、高次脳機能障害の診断があった者（重複障害の者を除く）は237名（平均年齢67.8±17.2歳、男性142名・女性94名・不明1名）、知的障害、発達障害、高次脳機能障害のうち複数の診断があった重複障害者は84名（平均年齢44.1±28.7歳、男性50名・女性34名）であった。

2) 診断別の自由記述回答の概要

①知的障害

自由記述回答の総抽出語数は1,443語、異なり語数は762語、文数は175文であった。なお、異なり語数とは、全体で異なる単語の数のことである。回答の概要を把握するため、階層的クラスタ分析を行い出現パターンの似通った語の組合せを抽出した（図1）。なお、概要把握のためクラスタ数を6~4個程度にすることとした（他の診断でも同様）。そのために使用した語は回答者数5名以上のものに限定した。

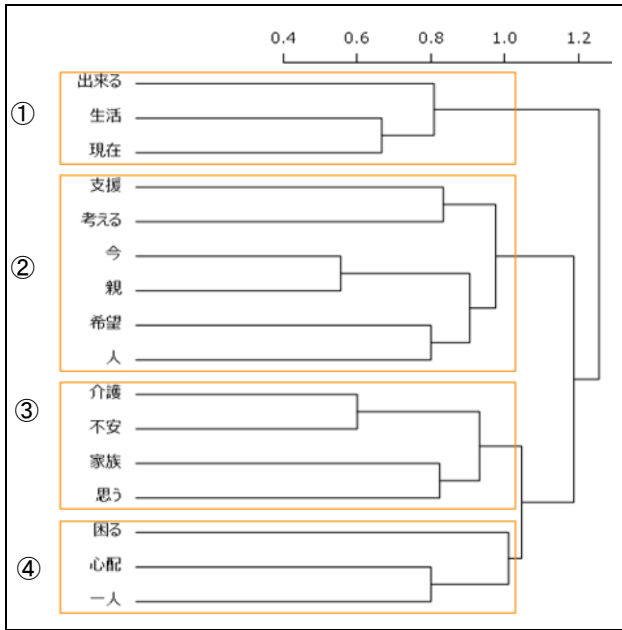


図1 クラスタ分析の結果（知的障害）

抽出されたクラスターは、図の上から、①「出来る」「生活」「現在」、②「支援」「考える」「今」「親」「希望」、③「介護」「不安」「家族」「思う」、④「困る」「心配」「一人」の語の組合せであった。次に、抽出された語が含まれ回答に戻り、内容を確認した。結果、①では「現在」は何か「生活」「出来ている」が今後が不安、②では「今」は「親」と同居しているが将来が不安または「支援」が必要、③では「家族」が「介護」しているが今後の「不安」や負担が大きい、④では親が亡くなり「一人」になったときや、「一人」暮らしのときに「困る」、「心配」という内容が見られた。

②発達障害の診断があった者

自由記述回答の総抽出語数は11,237語、異なり語数は2,916語、文数は1,231文であった。回答の概要を把握するため、階層的クラスタ分析を行い出現パターンの似通った語の組合せを抽出した(図2)。なお、使用した語は回答者数30名以上のものに限定した。

抽出されたクラスターは、図の上から、①「困る」「多い」「支援」「必要」、②「家族」「理解」「人」、③「考える」「今」「障害」「思う」「障害者」「受ける」、④「将来」「生活」「不安」「親」、⑤「本人」「心配」「現在」「仕事」「出来る」「子供」、⑥「学校」「自分」「行く」

「心配」「現在」「仕事」「出来る」「子供」「学校」「自分」「行く」の語の組合せであった。次に、抽出された語が含まれ回答に戻り、内容を確認した。結果、①では「支援」が「必要」、②では「家族」の負担が大きい、「家族」なき後が不安、社会や学校に障害や病気を「理解」してもらいたい、③では「障害」の程度が軽く障害年金が受け取れない、利用できる施設、サービスが限定的である、「障害」があっても働きたい、「障害者」の避難生活が不安、④では「親」なき後等の「将来」が「不安」、一人暮らしや安定、自立した「生活」ができるか「不安」、⑤では「仕事」が「出来ない」、「仕事」があるか不安、「子供」の将来が不安という内容が見られた。

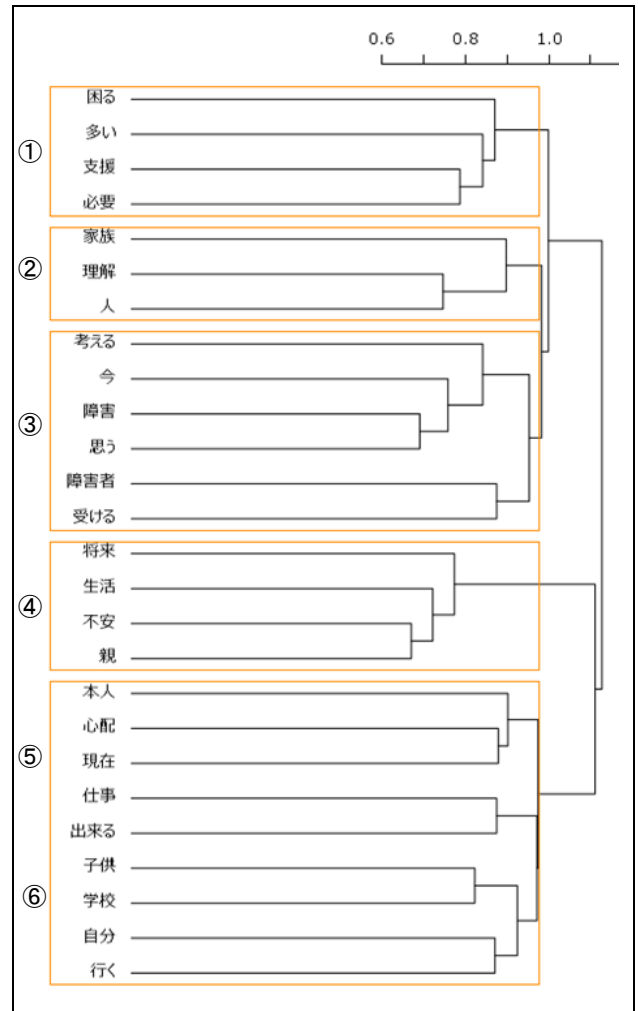


図2 クラスタ分析の結果（発達障害）

③高次脳機能障害の診断があった者

自由記述回答の総抽出語数は 5,731 語、異なり語数は 1,987 語、文数は 709 文であった。回答の概要を把握するため、階層的クラスター分析を行い出現パターンの似通った語の組合せを抽出した(図 3)。なお、使用した語は回答者数 20 名以上のものに限定した。

抽出されたクラスターは、図の上から、①「家」「考える」「病院」「行く」、②「生活」「不安」「今」「出来る」「思う」、③「困る」「介護」「妻」、④「家族」「本人」「心配」「自分」「人」の語の組合せであった次に、抽出された語が含まれ回答に戻り、内容を確認した。結果、①では「家」から出られない、「家」での生活を望んでいるが介護が難しい、「病院」が遠い、「病院」へ行くのが大変、②では家族がいなくなったとき、自身が病気になったとき等、今後の「生活」が「不安」、③では家族が「介護」しているが「妻」等が「介護」できなくなったときが不安、④では「自分」では何もできない、「本人」と意思疎通できないという内容が見られた。

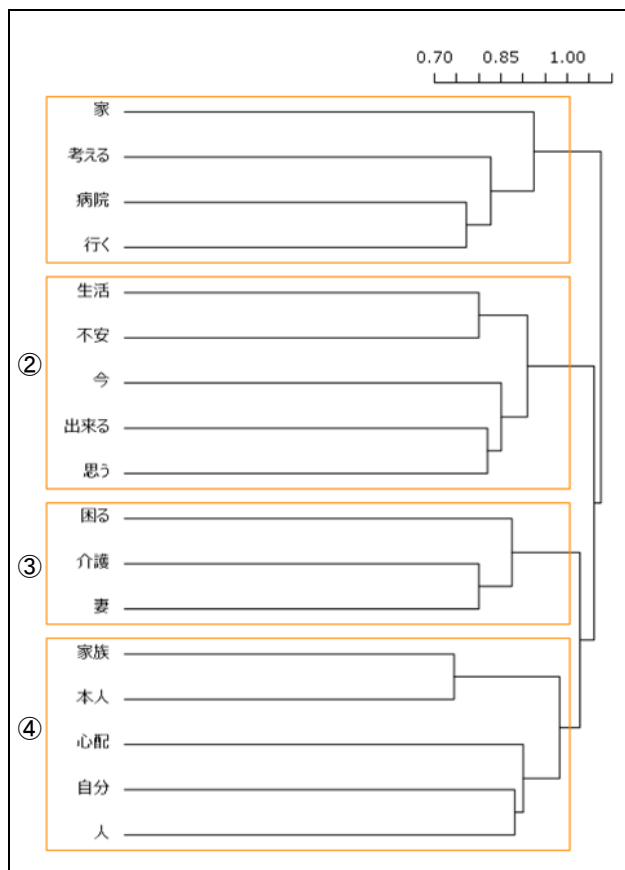


図 3 クラスター分析の結果 (高次脳機能障害)

④重複障害の診断のあった者

自由記述回答の総抽出語数は 2,920 語、異なり語数は 1,239 語、文数は 338 文であった。回答の概要を把握するため、階層的クラスター分析を行い出現パターンの似通った語の組合せを抽出した(図 4)。なお、使用した語は回答者数 10 名以上のものに限定した。

抽出されたクラスターは、図の上から、①「今」「生活」「人」、②「考える」「困る」「必要」「出来る」「理解」「思う」、③「支援」「不安」、④「学校」「子供」「親」の語の組合せであった。次に、抽出された語が含まれ回答に戻り、内容を確認した。結果、①では「今」どうすべきかわからないという不安、親なき後や、貯金、収入がなくなったとき将来の「生活」が不安、②では、③では障害がある人となない人の中間への「支援」が必要、将来一人で生きていける「支援」が必要、手帳を持っていないので「支援」が受けられない、④では「学校」で適切な支援が受けられない、「親」なき後が不安という内容が見られた。

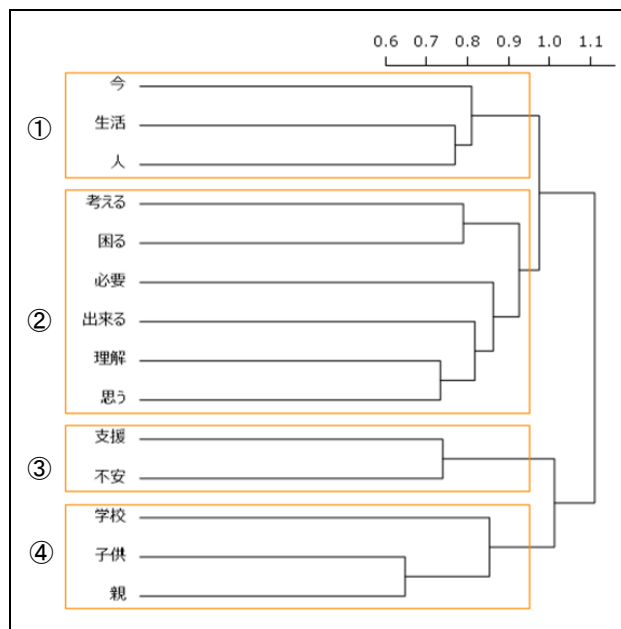


図 4 クラスター分析の結果 (重複障害)

3) 各診断の自由記述回答の特徴

各診断の回答の特徴を明らかにするため、各診断の比較を行った。はじめに、各診断の回答の特徴を視覚的に示すため各診断を外部変数とした対応分析を実施した（図5）。対応分析とは、数量化理論Ⅲ類の分析手法でコレスポンドス分析した結果を図示したものである。各診断は個別に抽出語を伴って付置され、診断ごとの回答に特徴の違いが見られることが示唆された。

次に、診断別の回答で多く出現し、各診断を特徴づけるような語を明らかにするため、Jaccard係数を算出し、値が大きい上位10語を特徴語として抽出した（表1）。Jaccard係数は、文の類似度を表し、値が大きいほど文の距離が近く類似しているといえる。次に、各診断ごとの回答の特徴語について、元の自由記述回答に戻り文中での意味を確認した。

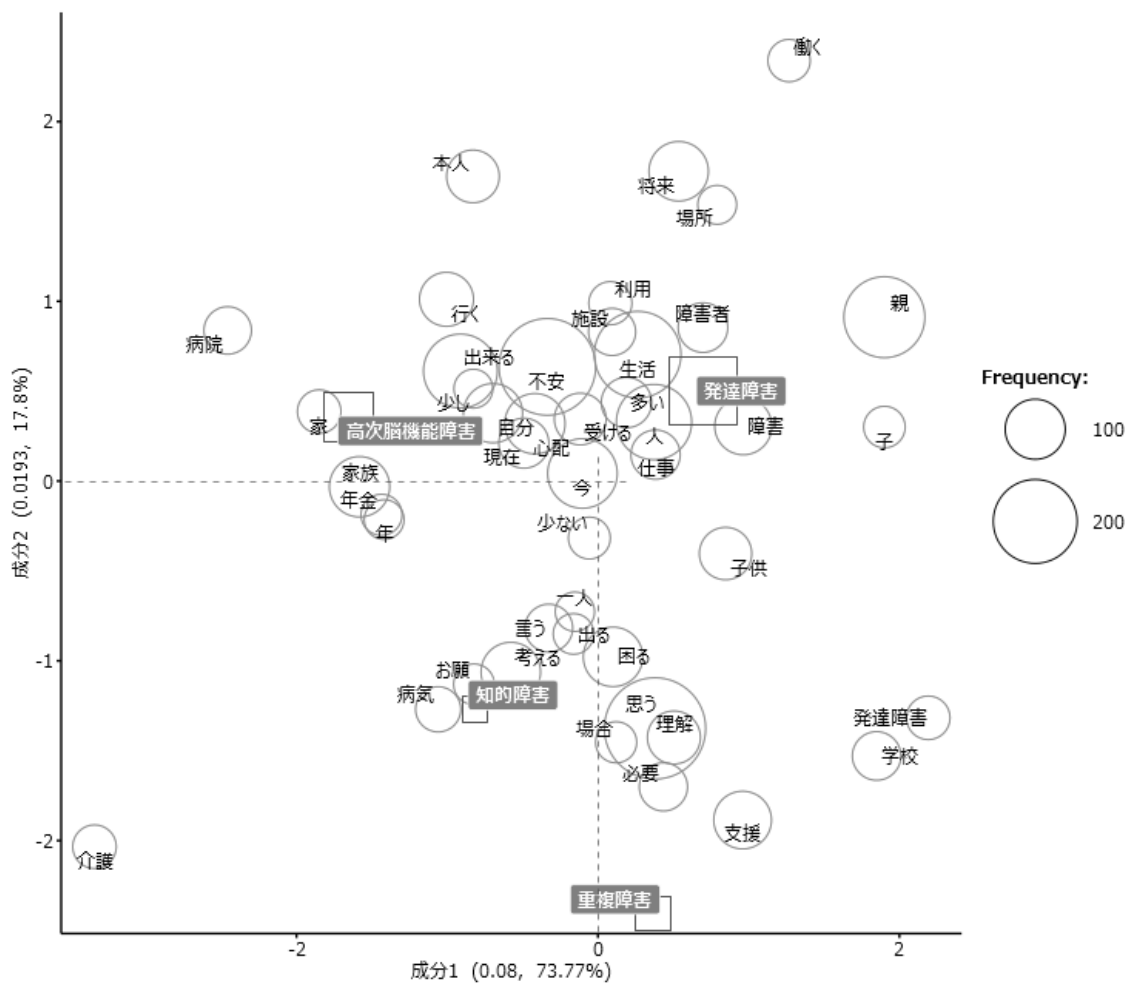


図5 対応分析の結果（診断別）

表 1 診断別の特徴語

知的障害		発達障害		高次脳機能障害		重複障害	
考える	.073	親	.339	出来る	.125	思う	.116
希望	.071	不安	.319	家族	.113	入れる	.087
心配	.065	生活	.264	妻	.100	人	.086
無い	.064	思う	.255	介護	.095	必要	.086
望む	.062	将来	.197	病院	.084	困る	.080
本当に	.060	今	.188	本人	.080	理解	.076
一人	.059	人	.177	家	.077	子供	.075
困る	.057	障害	.156	年金	.069	学校	.074
介護	.056	出来る	.146	特に	.060	対応	.074
乗れる	.054	支援	.138	食事	.057	病気	.073

①知的障害

特徴語の含まれる回答では、不安なこととして、親なき後のことが「考えられない」「心配」、「一人」になったときや、家族が具合悪くなったとき、「介護」する人がいなくなったときに「心配」、学校や今後の発達が「心配」等が見られた。また、困っていることとして、住環境、歩行、病院が近くに「無い」ので家族の負担が大きいこと、電車や車に「乗れない」こと、エレベーターになかなか「乗れない」こと等が見られた。また、本人の「希望」は施設への入所と在宅生活のどちらの希望も見られた。また、要望として、役所で働く人の障害への理解、家族の「介護」負担の軽減等が見られた。

②発達障害

特徴語の含まれる回答では、将来の仕事や結婚の不安、今後のどの部分がどの程度「出来る」ようになるのか等が見られた。要望として、親への「支援」、移動「支援」、長期休みのときの「支援」、見守り「支援」、個別の生活「支援」、生活のコーディネート、普通学校で情報や「支援」について教えてくれる窓口、全面的「支援」、学校での適切な「支援」、地域格差の解消等が見られた。

③高次脳機能障害

特徴語の含まれる回答では、麻痺や失語症等のためM仕事や生活上の様々なことができないこと、仕事、外出、買い物、「食事」、トイレ、自分で動くこと、コミュニケーション、意思表示や意思疎通、書くこと、理解すること、生活の場を求めること、障害サービスの利用（介護保険が優先）、安心して

施設に預けること等が見られた。また、現在は、親や「妻」等の配偶者や子といった「家族」が「介護」や金銭的支援をしているが、「家族」が高齢化や病気で支援できなくなったときに生活が「出来なくなる」こと不安等が見られた。また、「家族」の負担が大きく、「家族」向けの制度やサービスが求められていた。また、近くに「病院」がないこと、「病院」の差額ベッド代が負担なことなどが回答されていた。また、「病院」、買い物のための外出の支援が求められていた。また、「年金」が少なかったり、ないため生活への不安等が見られた。

④重複障害

特徴語の含まれる回答では、困っていることとして、「人」の言うことが聞こえなかったり、話せなかったりコミュニケーションの難しさがあること等が見られた。また、要望として、障害のない「人」と比べ時間や場所の「必要」なこと、病院や「学校」で適切な「対応」が必要なこと、一般の「人」に障害を「理解」して欲しいこと等が見られた。また、不安として、将来頼れる「人」がいないこと、家族が「病気」になること、本人が別の「病気」になること等が見られた。

D. 考察・結論

本研究では、調査データの利活用の検討の参考とすること、および障害者のニーズの把握のため、知的障害、発達障害、高次脳機能障害、それらの重複障害の診断があった者の生活のしづらさの自由記述回答について質的分析を行った。

1) 障害者ニーズ（全体）

各診断の回答を整理すると、複数の診断に共通するニーズが抽出された。まず、知的障害、発達障害、高次脳機能障害、重複障害の全ての診断で、親や家族が介護できなくなったときの金銭的なものも含めた将来の生活への不安があることが明らかになった。このことから、家族の支援に頼らずとも、障害者が自立して地域で生活できるための制度・サービスや環境の整備が求められていることが示唆された。具体的な記述として、たとえば十分な年金や補助金、個別の生活支援や、生活のコーディネート、全面的支援等が求められていた。また、全ての診断で、家族の負担が大きいことが示唆されており、家族が支援を行う場合、その負担を解消、軽減する方策も検討が必要であろう。具体的な記述として、たとえば知的障害と高次脳機能障害とともに病院が近くにないことが困りごととして挙げられているため、通院支援や交通費の補助等は負担軽減に役立つ可能性がある。また、発達障害では長期休暇時の支援、見守り支援等が求められていた。また知的障害、発達障害、高次脳機能障害ともに、移動や外出に困っており、通院以外の移動、外出を支援するサービスも求められていた。また、知的障害、発達障害とともに、今後の発達が心配されており、また学校での適切な支援が求められていた。このことは、知的障害、発達障害が主に先天性の障害であり、調査対象に低年齢の者が含まれているため、回答者である親が今後の発達への不安を抱えていること、学齢期の適切な支援を求めていることが反映されている可能性がある。対策として、今後の発達への不安については、適切な情報提供とともに不安を抱える親への心理的支援、また学校で適切な支援が提供されるための環境整備、人材育成等を検討していく必要がある。また、知的障害、高次脳機能障害とともに、住環境や、歩行に課題を抱えていた。このうち住環境については、住環境整備の補助や、在宅支援、また歩行については移動支援や支援機器の提供、場合によっては訪問診療等も役に立つ可能性がある。また、高次脳機能障害、重複障害とともに、意思疎通やコミュニケーションに課題があることが明らかになった。これについては、より効果的なリハビリテーション手法の開発や、意思疎通の

ための支援機器の開発等が期待される。

2) 障害者ニーズ（診断別）

各診断の回答を整理すると、各診断に限定して見られたニーズは下記であった。①知的障害では、移動のためのエレベーターが混んでおり乗るのに時間がかかることに困っていた。これは、バリアフリー環境に関する課題であり、知的障害に限定せず対応が必要であろう。具体的には、環境整備の促進や、障害者の優先利用のための掲示や啓発等が考えられる。次に、②発達障害では、仕事、結婚、避難生活への不安、支援の地域格差の解消への要望が明らかになった。これらは、どの障害にとっても重要であるものの、発達障害の特性や回答者の年齢等を反映している可能性がある。たとえば、震災時に、情緒・行動面での問題や、自閉的行動特性の強い者ほど、震災の影響を受けている可能性が指摘されており³⁾、そのような特性のある発達障害のある者では、災害時により様々な配慮が必要な可能性がある。また、適切な情報提供や、早い段階から就労を見すえた支援を行うことが効果的な可能性がある。結婚については、障害に対する理解の促進、また同じ障害の当事者による相談（ピアカウンセリング）等が役に立つ可能性が考えられる。避難生活については、障害特性に配慮した適切な防災対策や支援の整備、および適切な情報提供が必要であろう。地域格差の解消については、障害者基本計画等に基づき必要な機関等の整備が計画的に進められているが、特に実際のサービスについては、支援内容の普及、人材育成等により質の向上、均てん化をさらに進める必要があると考えられる。次に、③高次脳機能障害では、できないことが多いという課題が明らかになった。これについては、より効果的はリハビリテーション手法の開発や、機能を補う支援機器の開発が期待される。次に、④重複障害では、病院での適切な対応、社会の障害理解についての要望が明らかになった。これらは、障害に関わらず障害者の権利保障や、共生社会の実現の観点から重要である。適切な対応については、人材育成や適切な対応の伝達等が効果的な可能性がある。社会の障害理解については、普及啓発をさらに進める必要があるが、効果的な普及啓発方法についても検討していく必要がある。

3) まとめと今後の課題

自由記述回答に見る障害者のニーズには、親や家族なき後の将来の生活への対応、家族の負担への対応、通院支援、移動支援、学校や病院での適切な支援、バリアフリー環境の整備、仕事、結婚、避難生活への不安への対応、地域格差の解消、社会の障害理解の促進があることが示唆された。

本研究は、自由記述回答を質的に分析したものであり、量的な回答の数によらず、個別のニーズを抽出した。テキストマイニングによる抽出語、特徴語の抽出と、それが含まれる記述内容の分析により、具体的個別的なニーズ抽出できたと考える。得られた項目については、今後、内容および対応の検討を進めることが期待される。また、これらの自由記述回答より得た内容を、今後の調査項目に反映することは、当事者ニーズを把握することに役立つ可能性がある。

本研究の今後の課題は下記の2点である。1点目は、本研究で分析対象とできたのは元の調査で得られた診断種別だけである。そのため、今後は、身体障害や発達障害、高次脳機能障害以外の精神障害等についても比較できればより詳細な内容が把握できる可能性がある。2点目は、本研究の分析対象は、手帳の有無に関わらず診断があった者であった。そのため、手帳の有無によりニーズに違いがある可能性がある。今後は、手帳の有無についても分析が必要であろう。

E. 引用文献

1. 厚生労働省. 平成23年生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者実態調査).
https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/seikatsu_chousa.html
2. 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版. 2004.
3. 金子健. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 災害時における知的・発達障害を中心とした障害者の福祉サービス・障害福祉施設等の活用と役割に関する研究 平成24年度～26年度 総合研究報告書. 2015.

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

- 1) 国内
原著論文 0件
口頭発表 1件
それ以外(レビューなど) 0件

・学会発表

1. 清野絵、北村弥生、今橋久美子、飛松好子. 平成23年生活のしづらさなどに関する調査の自由記述回答の分析: 発達障害者のニーズ. 日本リハビリテーション連携科学学会第21回大会. 埼玉. 2020-3-7.

H. 知的財産権の出願・取得状況 なし